

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業  
(実社会対応プログラム)

# 研究成果報告書

「国境観光：地域を創るボーダースタディーズ」

研究代表者： 岩下 明裕

(北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター  
教授)

研究期間： 平成25年度～27年度



## 1. 研究基本情報

課題(研究領域)名	観光の人文・社会科学的深化による地域力の創出
研究テーマ名	「国境観光: 地域を創るボーダースタディーズ」
責任機関名	国立大学法人北海道大学
研究代表者(氏名・所属部署・役職)	岩下 明裕・スラブ・ユーラシア研究センター・教授
研究期間	平成25年度 ~ 平成27年度
委託費	平成25年度 2, 000, 000円
	平成26年度 5, 000, 000円
	平成27年度 3, 000, 000円

## 2. 研究の目的

本研究は、人文・社会系の研究の再確立を図る境界研究（ボーダースタディーズ）の一領域を占める国境観光（ボーダーツーリズム）に関する学術成果を、観光学研究者の参画と現地実務者たちとの連携を通じて社会化し、日本の国境離島及び自治体の地域力創出に寄与しようとした。近年、地域発展のため「観光立国」を目指す様々な施策が行われているが、「都市部への外国人観光客誘致」の議論はトレンドでも、国土保全にとっても不可欠な国境地域を豊かにし、そこに暮らす人々の地域力を高めようとする視座は皆無といえる。また日本観光研究学会などでも国境・境界を観光資源として位置づける議論は少なく、あったとしても観光タイプやルート設定を論じる程度で、境界や境界地域研究の内外の知見を踏まえての分析には至っていない。ボーダースタディーズの知見に基づく、観光の学問的知見の提供とその実践は、国境や境界を越え近接して暮らす住民たちが平和で友好的な関係と交流を築くための足場となり、これをもとに「特区」づくりなどの青写真も描くことができた。

これまで国境や国境地域があまり注目されてこなかったことには理由がある。第1に、理解の欠如である。すなわち、第2次世界大戦後、日本では政治地理学の学問的意義が否定される一方で、中央集権的な国土政策が進められた結果、現代の国境地域の事例が人文・社会系の研究であまり取り上げられなくなった。第2に、国際・国・地方の様々なレベルでの、国境認識のギャップ、制度の一元的運用の難しさ、問題の容易なる政治化に伴う障害がある。要するに、国境地域は長年「要塞」、良くて「行き止まり」として見なされ、国境地域を外に向かう「ゲートウェイ」として活用し、国境を「観光資源」として地域が使うという発想がもたれることは稀であり、それらが観光学はもとより、人文・社会系の事例研究で取り上げられることもほとんどなかった。

しかし、欧州や北米、中露の国境地域などでは境界を跨ぐ交流が日常化している地域も少なくなく、なかでも観光を軸にした事例研究はいくつもある（例：ナイアガラ[米加国境]、ティファナ[米墨国境]、ジョホールバル[シンガポール・マレーシア国境]）。これらいわゆる国境観光（ボーダーツーリズム）は、いまだ事例紹介の次元にとどまるが、1）近接国境をもつ2地域間の連携をベースにレジャー、買い物、友人・名跡訪問などによる相互の流動人口の活発化、2）（出入国が難しい場合には）国境地域そのもの及び関連名跡を観光資源にスタディーツアーなどで国内のインバウンドを増やす（国境を越えない「国境」観光の提唱）、など共通項目の洗い出しにより学問体系化の萌芽を見出すことが可能となる。他方、我が国でも福岡や稚内など国境観光に資する実践的事例はあるものの、先述したように、国際観光としての観光客・コンベンション誘致の論議に留まっていた。その結果、対馬のように人口の倍以上の韓国人観光客が入域する地域があるにもかかわらず、観光学の知見は地域の発展にあまり寄与できなかった。要するに、日本の国境地域は観光学の発展にとって大きな潜在性を有しているが、観光学はまだ対応の途上にあると整理できよう。本事業では内外のボーダースタディーズの総合的知見を動員し、（世界でも研究途上の）国境観光をしかるべき学問領域として位置づけるとともに、歴史・文化遺産及びコミュニティを基盤としたツーリズムの開発を手掛けてきた観光学研究者の主体的な参画により、地域還元型フィールド研究の成果を下敷きに地域振興の具体的な提言づくりに成功した。観光を通じた地域力

強化の新たなモデルづくりにより、観光学の人文・社会系研究分野での深化にもしつつある。成果は当該地域、諸学会・実務者群のみならず、世界の研究コミュニティに還元されている。

なお本研究は、境界地域の自治体を包摂した境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) との全面的な協働のもとで実施され、福岡や札幌のシンクタンク、また NPO 法人国境地域研究センター及びその会員たる ANA セールス、JR 九州高速船、対馬や稚内の地場産業などのビジネス界の支援と協力のもとに実施された。もとより、学問研究としての事業であり、その中核をなすのは、境界地域研究を内外でリードする研究者群であり、北海道大学、九州大学、中京大学が全体を牽引した。

なお「国境」という概念は国家間の境に限定されるが、「境界 (border)」「境界地域 (borderlands)」という概念はより広く、国内の様々なボーダーをも包摂する。観光資源としての深みと広がりから、本事業は国境を念頭に主たる調査・分析を組んでいるが、後述するように、国内の地域を越えた様々な空間の重なりをも資源とするべく、理論的実践的な方向へとウイングを広げてきた。従って、以下ではボーダーツーリズムという表現で統一した。なお、概念については、A・ディーナー/J・ヘーガン (川久保文紀訳) 『境界から世界を見る：ボーダースタディーズ入門』(岩波書店)、岩下明裕『入門国境学』(中公新書：特に後半はボーダーツーリズムについて詳しく言及)などを参考にされたい。

### 3. 研究の概要(研究プロジェクトチームの体制についても記述)

本研究は日本の国境(境界)諸地域の地域力を高めるべく、ボーダーツーリズムにかかわる実践を通じ、研究(境界研究と観光学)と実務(現地シンクタンクと行政)及びビジネス界との共働により、日本に適合的な国境観光の学問的枠組を確立し、その成果を踏まえ、関係諸自治体への政策提言を行うものである。

具体的には、ボーダーツーリズムが実施可能な地域を同定し、《研究者》《シンクタンク/NPO》《自治体》《市民》《ビジネス》の相互連携を軸に、ツアーを組織することでそのフィービリティをモニタリングし、これら経験を踏まえたうえで、ツーリズムの新しいかたちを提唱した。

本研究は、大きく以下の4つのステージを念頭に遂行された。A(調査とプランニング):研究者が現場に入る:自治体の振興部局、観光協会などとの協働、B(観光ツアーの組織と資源分析):現地シンクタンク、観光業界、キャリアなどと連携し、観光資源を発掘、C(国境地域再生への提言):日本のなかでモデル化し、世界の国境観光のなかでこれを文脈化、D(国境地域間の連携と相互ネットワークの展開)といった段階ごとに事業を随時、発展させることとし、その手がかりとするトライアウトの地域を対馬に設定した。さらに対馬においてこれを先行させ、モデル化することで、他地域、例えば、北海道・稚内とサハリン、沖縄・八重山と台湾など、歴史的紐帯が深く、かつキャリアなど交通手段が確立し、すでにある程度の往来実績を持つ、日本の国境・境界地域へと広げていく。次の段階として、成果をまとめ、国境を越えない境界地域などへの観光、あるいは出入境ポイントをもつ日本の地方都市をベースにした海外展開のボーダーツーリズムなどの可能性を見出しつつ、世界のボーダーツーリズムの実践との比較検証を進める。最終段階としてはこれらの経験を総括及び理論化し、内外の観光学及びボーダースタディーズの研究コミュニティに対して成果を発信するとともに、国境・境界地域におけるツーリズムを定着させることとした。

ではなぜ、対馬を最初の手がかりとしたのか。対馬沖は大陸棚も漁業水域も含め、日韓で境界が画定した(日本の領海・排他的水域において数少ない)場所であり、兩岸の釜山・福岡が国境を越えた「超広域経済圏」づくりを進めるなど、日本でもっとも先進的な国境交流が行われている地域である。だがこの「経済圏」の中心に位置する対馬では人口流出がとまらず、6町合併後も有効なまちおこしができないまま経済的苦境が続いていた。他方で韓国への近接性から、韓国人観光客が激増し2013年は5月までに約41万人が航路を利用するなど(日本人は9千人ほど)観光地として潜在的な魅力をもつことは明らかであった。問題はその観光様態のアンバランスであり、対馬市役所や市民の多数は韓国人観光客なしでは生活がなりたないという現状を受け入れながらも、日本人観光客の増大と政府やビジネスによる(日本側の)観光振興を模索し続けてきた。

このような国境地域の現況を鑑み、本事業はボーダーツーリズムの手法を用いて、研究者、行政実務者、ビジネスなどが一体となり、市民が参画するかたちで、国境離島における観光の実践を提案した。日本人観光客の誘

致を目的に、韓国から50キロの上対馬での聞き取りを通じた観光資源の発掘を行い、これをユーラシア大陸にむけた「ゲートウェイ」と位置づけ、「国境のまち」をコンセプトに置いた観光まちおこしプランの策定を開始する（ステージA）。第2に宿泊施設の少なさ、足回りの悪さを考慮し、また、対馬を知らない観光客の掘り起こし（リピーターづくり）をめざし、市民ベースのNPO国境地域研究センターや現地シンクタンク、境界自治体の連携組織（境界地域研究ネットワークJAPAN）の協力のもとANAセールス、JR九州高速船、JR九州旅行社、近畿日本ツーリストなどとタイアップして、対馬と釜山をセットにした国境観光商品を開発し、モニターツアーを2013年12月と2015年3月に、ルートや趣旨を変えて、二度、実施した（ステージB）。さらに対馬市との協働により、国境ミュージアムの整備など日韓双方の観光客のための国境観光空間の創出にむけた青写真をつくり、地域力の発信源とする。また、釜山・福岡との連携を通じて、欧米からの観光客やコンベンション誘致のインフラをつくるための手がかりを提言した。本事業分担者の出水薫が主導した九州大学と対馬市のまちおこしや若手人材交流に関わる協定締結（2015年2月）はこれら成果の延長線上にある（ステージC）。これらの成果と経験をもとに稚内・サハリンのモニターツアーが2015年6月に実施され、八重山・台湾でも計画が進んでいる。これらのステージと並行して、国際学会などで本事業の成果発信がなされ、またこれをEUや中東の事例などとともに文脈化し、ボーダーツーリズムの汎用性や理論化も行いつつある。さらに国境を越えないボーダーツーリズムをコンセプトに、北海道の太平洋岸の道東（釧路・根室）からオホーツクを縦断（網走・紋別）、さらには道北（猿払・稚内）に至るツアーを計画しており、衰退しつつある北海道の周辺地域の新たな観光コンテンツづくりにも着手している（札幌・千歳を起点に道北、道東などの横の周遊ルートは一般的であったが、道北と道東を縦に結ぶルートは画期的とされる）。さらに新潟からハルビンへの既存のキャリアを利用した中露国境ツアー（綏芬河からウラジオストクへ抜ける）などまさにボーダーツーリズムの応用可能性は、本事業の実践成果とともに発展し、新たな可能性をもちつつある（ステージD）。

ここで本事業の2年間の活動を整理しておく。上記で整理したステージの4段階は、一つの地域においても相互に連携している部分も少なくはなく、また対馬や稚内など対象とする地域が変われば主たるステージが異なることもあり、下記に記載した取組内容におけるステージ区分は、主として対馬を対象としたものをまとめた目安である。さらにステージB（観光ツアーの実施と資源分析）は同一地域でも趣旨や顧客の対象を変えながら実証実験を積み重ねるため、反復されながらステージC（国境地域再生の提言）に盛り込まれる性格を持つこともお断りしておきたい（例えば、対馬・釜山モニターについては第1回が2013年12月、第2回が2015年3月に実施）。

なお本事業の実施にあたり、研究代表者（岩下）とともに対馬の観光資源調査やボーダーツーリズムの実施を手掛けてきた花松泰倫が、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターから、本事業の委託分担者である出水薫が組織する九州大学・持続可能な社会のための決断科学センターのチームへ移動したことにより（2014年2月から）、「対馬モデル」の創出は北大・九大の共同事業となった。花松は九大のチームを実質的に牽引し、その成果は研究代表者と並ぶものとなっている（業績を参照）。地方自治体やシンクタンクなどの実務者の組織連絡業務は、もうひとりの委託分担者である中京大学の古川浩司（現・境界地域研究ネットワーク副代表幹事）が主として担っており、本事業のシンポジウムやセミナーなどはその成果であることを付け加えておく。

#### 4. 研究成果及びそれがもたらす効果

##### (1)ボーダーツーリズムの普及により境界・国境地域へのイン・アウトバウンド増加への道筋の確立

「国境のまち・対馬」をモデルとしたボーダーツーリズムによる国境離島及び地域に対する振興の手法と成果については、すでに社会に認知されつつある。長崎新聞、西日本新聞、テレビ西日本（TNC）、福岡放送（FBS）などの地元紙・放送局はもとより、北海道新聞、新潟日報などの地方紙・ブロック紙、朝日新聞などの全国紙で紹介され、特集番組・記事などが数多く出されている。とくにNPO国境地域研究センターが本事業への協力により作成したロゴは、モニターツアーを始め、ボーダーツーリズムに関心をよせる様々なイベントなどで共通して使用されている。特に2015年度からはANAセールスがボーダーツーリズム・モニターツアーの旅行主催者として公式に関与を始め、対馬・釜山ツアーの成果を踏まえた、稚内・サハリンツアーの実施については（2015年6月15日出発）、稚内市、商工会議所の稚内観光における支援を受け、地元の北都観光がサハリン観光部分を組織するという、中央

と地方のビジネスと行政が、直接結びつく画期的なかたちでの事業展開に入った。稚内・サハリンについては2015年9月のツアーでも第2弾が計画されており、ANAセールス（東京都日本橋）でセミナーを開催した（2015年6月29日：岩下と島田が講師）。



NPO国境地域研究センターによる

ロゴ：全ての関連ツアーで用いられ  
実社会にインパクトを与えた

また本事業開始時期には、web上でほぼ皆無であった「国境観光」「ボーダーツーリズム」の用語も、いまでは「現代用語の基礎知識2016」の「外来語」「世相語」の項目に採用されるなど、社会的に新しいツーリズムのかたちとして評価されている。本研究はすでに終了しているが、2016年度に入り、旅行社からの主体的なボーダーツーリズムの動きが高まっている。稚内・サハリンでは北都観光が2度のツアーを、新潟発ボーダーツーリズムとしてMOツーリストが中国とロシアの国境ツアーを（クロスではなく周遊型の新しい商品開発。後段の多様なボーダーツーリズムを参照）、これまでの事前調査をもとにビッグホリデーが福岡発の沖縄八重山・台湾ツアーをそれぞれ組織し、研究者やNPO、行政ネットワークがこれを支援、協力する。いわば、ボーダーツーリズムは自発的かつ持続的な展開の段階に入っており、本研究のイニシエーターとしての役割はまさにこの点において大成功と自負できる。なお本研究期間中の事業一覧（メディア記事などを含む）はホームページなどを参考。

## (2)クロス・ボーダーツーリズムから多様なボーダーツーリズムへの進化

本事業のステージDは、他地域への成果の波及をどのように行うかがその課題であるが、上述したように稚内・サハリンではすでにそれが顕著に見え始めている。沖縄・八重山と台湾については、九州経済調査協会のイニシエーターでビッグホリデーが主催するツアーが、竹富町や与那国町のみならず、石垣市も巻き込んだ事業展開が継続中である。2016年6月の福岡発ツアーはすでに完売している。

この2年間は、既存のキャリアを使い、地域を主要アクターとしながら、近接する国境地域から隣国の国境地域へと往来するクロス・ボーダーツーリズムの創出を主要なミッションとしてきたが、本事業が閉塞する地方の振興や活性化を目指すのであれば、そもそも国境が閉ざされた、あるいは隣国には直接渡れない地域や離島の振興へもボーダーツーリズムの応用を試みる段階が近づいているとみなせる。その最初のトライアウトとして、国境を越えないボーダーツーリズムを2015年10月にビッグホリデーの主催、北海道新聞などの協力で実施した。「国境のまち」と呼ばず眼前の島に渡れない根室を起点に、アイヌやオホーツク文化、ロシアとの関係性を学ぶと同時に北海道内の境界性を意識しながら、網走、紋別、稚内へと縦断した「太平洋からオホーツク・日本海を結ぶ」という「道東ボーダーツーリズム オホーツク・ゲートウェイ」は、ボーダーツーリズムを枠組みに、ボーダーランズ（境界地域）ツーリズム（「国境を越えないボーダーツアー」）という新たなジャンルを生み出すことに成功した。その応用編として、2016年秋に南洋群島とのつながりを意識した東京発のボーダーツーリズム「小笠原国境紀行」を、JIBSNとの連携で実施する予定である。また国内の海外にひらかれた都市（例えば新潟）をボーダーシティと位置づけ、近隣諸国の国境を周遊するトランス・ボーダーツーリズムも実現の段階に入った。前述の中露国境の旅はそれトラ

アウトとなるが、2017年3月には山口県立大学や山口のビジネス界の協力で、下関発、釜山・対馬・福岡の回遊型ツーリズムも準備中である。これは特に学生を主体に企画立案させる試みで、教育の現場でもボーダーツーリズムの広がりが実感できる。一連の研究作業はさらに地域に還元できる学問領域として進化しつつあり、これが社会にもたらす成果は本事業の当初計画をはるかに上回るものとなった。

### (3)さらなる社会貢献を目指して：実学への展望

クロスボーダー・ツーリズムの調査結果によれば、参加者間で一般とリピーターのニーズの差が明らかである。安くて手軽なツアー、経費も時間もかかるが希少なツアーなど様々なニーズにあわせた商品開発が必要である。そのためにも、理論的根拠の確定や分析のためのツールづくりが今後の課題となる。ボーダーツーリズムはこれまでタイプの分類、多様性の模索など経験学問的なデータ蓄積が必要な段階であるが、その成果は着実に進捗している。例えば、NPO国境地域研究センターが刊行するブックレット3号は、研究者のみならず、ツアーに参加した新聞記者、ツアーを解説した稚内市役所関係者、そして研究者が共同して昨年の稚内・サハリンツアーの成果をまとめた画期的な書となる（井潤裕編著『稚内北航路・サハリンへのゲートウェイ』北海道大学出版会、2016年6月刊行予定）。またこれまでの実証実験の分析をもとに、2016年度までの分析をすべて包摂した『国境観光（仮題）』（岩下明裕編著）も2017年の刊行を準備中である。

本研究の今後の深化、拡大には、ボーダーに関わるストーリー性が重要であらう。例えば、対馬と釜山は歴史や文化を軸に手掛けたが、フード、グリーンといったコンテンツごとにツアーの軸を組み替えることも可能である。対馬の自然を親子で体験して、初めての海外が釜山、といったモニターツアーも計画中である。とくに稚内・サハリンでエネルギーと環境を一つの柱としたエコ・ツーリズムのトライアウト（2015年6月）は、八重山などでの応用可能性を持つ。また、マイナスのイメージを持つ、根室（北方領土）、沖縄（基地）などの、いわゆるダーク・ツーリズムは、ボーダーツーリズムのなかで新しいイメージを持たせよう。例えば、対馬では法務局、自衛隊などとの協力で、国境地域ならではの施設をみる（入国管理の現場や基地観光）ツアーも構想のなかにある。

結論を言えば、本研究はボーダーツーリズムのそれぞれの実践をカテゴライズし、それを整理することで、観光学の中でのボーダーツーリズム、ボーダースタディーズのなかでのツーリズムとして学問的に確立する段階に入りつつある。とはいえ、これまでの観光学の諸研究の多くが学問的体裁づくりに力を注ぐあまり、実務者（特に旅行社、キャリアや現地の行政や市民グループなど）との連携が十全に機能してこなかったことを踏まえれば、何よりも実社会のニーズを最重視し、ビジネスや行政、市民らとともに作りあげられつつある本研究のここまでの成果は、実社会プログラムとして比類なきものと位置づけられよう。（別のよりアカデミックなプロジェクトや事業のなかで担うべきものである）性急な理論化や総合化を、実社会と称するこのプログラムにあえて持ち込まないことが、本プロジェクトが出発点において狙いとしたものであり、それこそが社会貢献の成果を担保するものだと私たちは考えている（社会はアカデミズムの内向きの言葉や分析に飽き飽きしている）。

### 【研究成果の発表状況等】

#### ○論文（計10件）

- ①「平成27年度 八重山・台湾における国境観光フィージビリティ調査報告書（抜粋）」、島田龍、境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）、全43頁、2016年3月。<http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/report/160307.pdf>
- ②「稚内・サハリン国境観光モニターツアー調査報告」、高田喜博、境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）、全30頁、2016年2月。<http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/report/160211.pdf>
- ③「対馬・釜山国境観光モニター調査報告」、花松泰典、境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）、全27頁、2015年6月。<http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/report/150605.pdf>
- ④「国境離島・対馬における『国境観光』の取り組みと課題」、花松泰倫、『九州経済調査月報』2015年6月号、16-20頁、2015年。（2014年度九経調地域研究助成顕彰・優秀賞論文）
- ⑤「国境離島とツーリズム：となりまちへのゲートウェイ」、岩下明裕、『九州経済調査月報』2015年6月号、1頁、2015年。

- ⑥「国境観光コンテンツ発掘・創出のための事前調査」、島田龍、境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN)、20 頁、2015 年 4 月。  
<http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/report/150507.pdf>
- ⑦「パレスチナにおけるコミュニティ・ツーリズムの展望：被占領地の境界侵食に抗して」、高松郷子、『境界研究』第 5 号、99-130 頁、2015 年。
- ⑧岩下明裕「解説：世界を変えるボーダースタディーズ」A・ディーナー・J・ヘーガン（川久保文紀訳）『境界から世界を見る：ボーダーツーリズム入門』岩波書店、173-182 頁、2015 年。
- ⑨“Tourism across the EU-Russian Border: Official Strategies vs Unofficial Tactics,”Sergei Golunov, *Eurasia Border Review*, Vol. 5, No. 2, pp.19-34, 2014.
- ⑩「対馬・釜山国境観光モニター調査報告」、島田龍、2014 年 2 月（岩下明裕・花松泰倫編『国境の島・対馬の観光を創る』に「対馬を通過して釜山に行こう：国境観光の挑戦」として成果を収録）

#### ○著作物(計8件)

- ①岩下明裕『入門国境学：領土、主権、イデオロギー』中公新書、2016年。全264頁。
- ②JIBSNレポート第10号『JIBSN根室セミナー2015』、境界地域研究ネットワークJAPAN、2016年4月、全71頁（長谷川俊輔、古川浩司、岩下明裕、中川善博、小嶺長典、花松泰倫、島田龍他）。
- ③『「見えない壁」に阻まれて：根室と与那国でボーダーを考える』、舛田佳弘/ファベネック・ヤン、北海道大学出版会（国境地域研究センター ブックレット・ボーダース第2号）、2015年、全80頁。
- ④『国境の島・対馬の観光を創る』、岩下明裕/花松泰倫編著、北海道大学出版会（国境地域研究センター ブックレット・ボーダース第1号）、2014年、全64頁。
- ⑤JIBSNレポート第10号『JIBSN竹富セミナー2014』第10号、境界地域研究ネットワークJAPAN、2015年2月、全54頁（川満栄長、小島和美、岩下明裕、古川浩司、島田龍、大浜一郎、高田喜博、大城正明、小濱啓由他）。
- ⑥JIBSNレポート第9号『日本初の国境観光・北海道・稚内の挑戦』、（岩下明裕、高田喜博、伊豆芳人、米田正博、藤田光洋他）、境界地域研究ネットワークJAPAN、2014年12月、全32頁。
- ⑦JIBSNレポート第8号『日本初の国境観光・対馬モデルの可能性を考える』、（島田龍、財部能成、岩下明裕、花松泰倫、伊豆芳人、藪野祐三、江口栄、川口幹子他）、境界地域研究ネットワークJAPAN、2014年10月、全38頁。
- ⑧JIBSNレポート第6号『JIBSN五島セミナー2013』、（財部能成、野口市太郎、岩下明裕、島田龍、池ノ上真一、本間浩昭、久保実他）、境界地域研究ネットワークJAPAN、2013年12月、全74頁。

#### ○講演（学会発表を含む）

- ①「平和のためのボーダーツーリズム：対馬-釜山の事例から」、花松泰倫、レジャー・サービス産業労働問題研究集会、主催：サービス・ツーリズム産業労働情報開発センター、会場：第一ホテル東京シーフォート（東京都）、2015年6月18日
- ②“Developing Border Tourism in Japan: The Case of Tsushima-Busan Cross-border Tour,” Yasunori Hanamatsu, 57th Association for Borderlands Studies (ABS) Annual Conference, April 10, 2015, Portland, US.
- ③“Border Tourism: The Cases of the EU-Russian Relations,” Sergei Golunov, CAFS Symposium, “Reshaping Border Studies on Asia and Pacific,” March 7-8, 2015, Nishitetsu Soloria Hotel, Fukuoka, Japan 参加者数80名（うち研究者30名、一般50名）
- ④“Tsushima as a Border Tourism Making Test in East Asia,” Yasunori Hanamatsu, CAFS Symposium, “Reshaping Border Studies on Asia and Pacific,” March 7-8, 2015, Nishitetsu Soloria Hotel, Fukuoka, Japan 参加者数80名（うち研究者30名、一般50名）



- ⑤“Integration of a Border Region in Asia: Border Tourism and Maritime Security between Tsushima and Busan,” Yasunori Hanamatsu, 2015 EU Centre’s Asia Pacific Researcher Workshop, Feb. 9-10, 2015, Jeju, Korea.
- ⑥“Developing Tsushima-Busan Tour: First Model of Border Tourism in Japan,” Yasunori Hanamatsu, Slavic-Eurasian Research Center 2014 Winter International Symposium, Hokkaido University, Dec. 4, 2014, Sapporo. 参加者数60名（うち研究者40名、一般20名）
- ⑦“Community Based Tourism as a Potential Tool for Reducing the Impact of Borders in the Occupied Territories: Tourism Activity Initiatives by Local Communities in Palestine,” Kuniko Takamatsu, Slavic-Eurasian Research Center 2014 Winter International Symposium, Hokkaido University, Dec. 4, 2014, Sapporo. 参加者数60名（うち研究者40名、一般20名）
- ⑧“Making Border Tourism: Asia, Eurasia and the World,” Akihiro Iwashita, 14th Border Regions in Transition (BRIT) International Conference, Nov. 4, 2014, Arras, France. 参加者数30名（研究者）
- ⑨“Developing Tsushima-Busan Tour: First model of Border Tourism in Japan,” Yasunori Hanamatsu, 14th Border Regions in Transition (BRIT) International Conference, Nov. 4, 2014, Arras, France. 参加者数30名（研究者）
- ⑩“Border Tourism as a ‘Big Tool’ for Regional Making & Development,” Akihiro Iwashita, 56th Association for Borderlands Studies (ABS) Annual Conference, April 4, 2014, Albuquerque, US.
- ⑪“New Challenge to Promote Border Tourism in Japan: The Case of Tsushima Island,” Yasunori Hanamatsu, 56th Association for Borderlands Studies (ABS) Annual Conference, April 4, 2014, Albuquerque, US.
- ⑫「国境の島・対馬の国境観光をつくる：北大・九大・九経調による合同プロジェクトに関する報告」、花松泰倫、島田龍、木村貴、北海道大学グローバルCOE「境界研究の拠点形成」ファイナルシンポジウム（札幌）、2014年2月15日、60名（うち研究者30名、実務者を含む一般30名）

#### ○ホームページ

・研究プロジェクトの軌跡(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 境界研究ユニットHP)

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/ubrj2/projects/border-tourism/>

・実証実験モニターレポート・ニュースなど(社会連携HP)

境界研究ネットワークJAPAN <http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/>

NPO法人国境地域研究センター <http://borderlands.or.jp/>